

二〇二二年四月三〇日

せせらぎの綺羅に紛れて糸蜻蛉
研ぎ師いま軽き音立て青葉影
奏である園の一水蝌蚪の池
画材屋のテント庇に燕来る
懸り藤仰ぐ大樹の名を知らず
小手毬の垣根を揺らしすれ違ふ
病窓に街動き出す音おぼろ
庭石に触れなんとする藤の房
蒲公英のグランド蹴つてキックオフ
針刺されゐること忘れ春眠し
春憂しやナースをオイと呼ぶ輩
男どち野球論戦躑躅燃ゆ
理髪師の剃刀頬に目借り時

ぼんこ
なつき
ぼんこ
むべ
愛正
よう子
たか子
わかば
こすもす
たか子
たか子
よう子
素秀

囀れるクレッシェンドを繰り返へし
繋ぎし手ほどきて蝶に駈け出す子
朧なる世界へ深く麻醉吸ふ
藤の香に酔ひたるごとく虻群るる
五彩なし里の山々笑ひけり
リハビリの歩数を延ばす若葉風
志賀直哉旧居の庭に春惜しむ
神名備を統ぶる大樹や懸り藤
古民家に語り部を聞く春の宵
むべ
なつき
たか子
はく子
こすもす
かかし
宏虎
はく子
むべ

毎週句会秀句・みのる選・二〇二二年五月一日